

## ～洛西からの一読～

### 今回のテーマは「どこかで誰かが」

どこかで誰かが、悩んでいる。どこかで誰かが、見守っている。  
どこかで誰かが、探している。どこかで誰かが、待っている。  
遠くの、近くの誰かに、思いをさせてー。



### 魔女たちは眠りを守る

村山 早紀／著 KADOKAWA

古い港町の駅に、電車が着きました。降りてきたのは、一匹の黒猫を連れた赤毛の娘。彼女は、三日月通りへと向かいます。その辺りに、煉瓦造りの古い建物がありました。一階は「魔女の家」というお店です。二階から上は、マンションになっています。実は、店の主は文字通り魔女で、マンションは魔女たちの住処です。赤毛の娘も、七瀬という名の魔女でした。

これは、七瀬を含む魔女たちと、人間たちが織り成す物語です。魔女は人に気付かれず、人とともに暮らしています。長い時を生き、亡骸は残さずに死んでいく魔女たち。彼女たちは、夜眠りません。なぜなら「ひとの子」の眠りを守っているからです。収められたお話はどれも、誰かが誰かを思いやる優しさに溢れています。時に、つらい歴史に翻弄されつつも懸命に生き、誰かを思いやる優しさを持ったひとの子たち。そして、そんな彼らを見守る優しい魔女たち。少し不思議なお話ですが、日々を生きる人々に寄り添う、愛に満ちた物語です。



### ネジマキ草<sup>そう</sup>と銅の城

パウル・ビーヘル／作 野坂 悦子／訳 村上 勉／画 福音館書店

千年、国を治めてきた王の寿命が、尽きようとしていました。かつては、にぎやかだった銅の城も今では寂しく、王の他にはノウサギが一匹だけ。王を心配したノウサギが呼んだまじない師は、「王のお命は長くて一週間」だと言います。しかし、心臓のネジを巻き戻すことができる「ネジマキ草」があれば、王は元気になるというのです。ただし、ネジマキ草を採ってくるのには、何日もかかるとのこと。

その間に王の命が尽きないよう、まじない師は旅の途中で出会ったものたちに、面白い物語を知っていたら銅の城に行って、王に話してくれるよう、声をかけていくと言いました。毎晩わくわくする物語を聞けば、王の心臓のネジが巻き直され、命がつながるためです。

そうして、険しい旅へ出発したまじない師。その日から毎日一組ずつ、王のもとへ訪問者がやって来ます。けれど、一週間たっても、まじない師は戻ってきません。果たして、王の命は助かるのでしょうか。

それぞれの動物が語るお話が、独立したおとぎ話のようで面白く、また最後まで読むと、銅の国の歴史を知ることにもなります。王を慮る動物たちの優しさ、そして物語の巧みさ。1964年に、オランダ児童文学を代表する作家が発表したこの作品。日本でも長く読み継がれてほしいです。